

審判活動の歩み

市川雄介

○審判活動との出会い

私は小学４年生からバスケットボールを始め、大学４年生までの１３年間、ずっとこの競技に打ち込んできました。審判活動と初めて出会ったのは、大学時代のことです。私が通っていた鹿屋体育大学では、「審判法」という授業があり、授業の一環として審判の基本的な動作や知識を学ぶ機会が設けられていました。しかし当時、選手としての活動に集中していた私は、審判法の授業にはあまり関心を持っていませんでした。年に一度、地域の中学生の大会で審判を担当する機会がありましたが、その経験は正直なところ、気が進まず、嫌々ながらこなしていたのを覚えています。

○中学校教員となって、部活動指導と審判活動の両立

大学を卒業後、念願だった中学校教員として広島市の中学校に赴任しました。バスケットボール部の指導を夢見ていた私にとって、赴任直後に女子バスケットボール部の顧問を任されたことは、とてもありがたいことでした。中学生を指導するのは初めてで、思うようにいかないことも多くありましたが、当時の自分が持つ力のすべてを注いで指導に取り組みました。地区大会にも参加しましたが、チームは期待通りの成績を収めることはできませんでした。しかし、その大会で出会った他校の熱心な指導者の方々から、指導法やチームビルディング、そして指導者としての心構えについて多くを学ぶことができました。また、その地区大会では、そうしたチームの試合の審判を担当することにもなりました。私自身も指導するチームや選手に強い思いを持っていたため、他校の試合を審判する際にも、関係者の熱意を感じ取り、その思いに応えられるよう、真摯な姿勢で臨むよう心がけました。参加するすべてのチーム、選手、そして指導者の思いに寄り添いながら、真剣に審判に取り組んだこの経験が、私にとって審判活動に本気で向き合うきっかけとなりました。

○カテゴリーを超えた審判活動と審査会

その後もチームの指導を続けながら、U15の大会を中心に審判活動にも取り組んでいました。そんな中、当時の広島市中体連審判長や広島県審判長の方々からお声がけいただき、U18やU22、さらには社会人の大会にも参加する機会をいただきました。担当するカテゴリーが変わると、プレーの質や選手・チームの雰囲気にも違いがあり、中学生の試合とはまた異なる緊張感がありました。新しい世界に対する不安もありましたが、それに負けたくないという思いから、積極的にさまざまな大会に参加するようになりました。この頃から、審判の審査会にも挑戦するようになりました。2012年には初めてB級審判審査を受けましたが、結果は不合格でした。ライセンスがなければ、よりレベルの高い試合を担当することができないという現実もあり、翌年も再挑戦する決意を固めました。そして

2013 年、念願の B 級審判審査に合格し、翌 2014 年から B 級審判員として活動を開始しました。B 級のライセンスを取得したことで、広島県内にとどまらず、中国ブロック全体の大会にも参加できるようになりました。

○ブロック大会・全国大会での経験と人との出会いを経て上級審判へ

都道府県を越えて、中国ブロックや全国規模の大会に参加することで、普段は担当しない強豪チームの試合を審判する機会をさらに得るようになりました。そうした試合から多くの刺激を受けたのはもちろんですが、何より大きな影響を受けたのは、他県の審判員との出会いでした。中には S 級審判員や国際審判員として活躍されている方もおり、その方々のレフェリングを目の当たりにしたり、直接お話を伺ったりする中で、自分も新たなレベルに挑戦したいという気持ちが芽生えていきました。当時はまだ B 級審判員でしたが、この頃から国際審判員を意識し始めたように思います。各地の大会に参加するなかで、多くの県外の審判員と交流が生まれ、人的なつながりも大きく広がっていきました。そうした経験を重ねた結果、ついに A 級審判審査に挑戦する機会を得ました。初めての A 級審査は 2016 年でしたが、結果は不合格。しかし、広島県バスケットボール協会の皆様のご支援もあり、翌 2017 年に再挑戦することができました。その年に合格し、2018 年から A 級審判員としての活動をスタートさせました。A 級取得後は、より多くの試合で主審を務めるようになり、責任ある立場で審判に臨む機会が増えていきました。また、制度上、A 級審判員となった年には S 級審査を受験する資格が与えられます。S 級審査で用いられる試合は、関東の大学 1 部リーグの試合です。これまで経験したことのない高度なスキル、スピード、パワーで展開される試合に対応するには、事前の準備が不可欠でした。そのため、私は関西や関東の大学リーグ戦に自費で参加し、実戦を通じてそのレベルに慣れることに努めました。そうした準備を経て挑んだ S 級審査に合格し、2019 年から S 級審判員として活動を開始しました。

○初めての B リーグでの審判と FIBA レフェリー審査

S 級審判員に認定されたことで、B リーグの試合を担当できるようになりました。初めて B リーグのコートに立ったとき、これまで経験したことのない観客の熱気や、外国籍選手と日本人選手が繰り広げるハイレベルなプレーに圧倒されたことを今でも鮮明に覚えています。コート上の張りつめた緊張感、選手や観客がつくり出す熱狂的な雰囲気、そして試合後に感じる充実感。それは、これまでに担当してきたどのカテゴリーの試合よりも、深い達成感を与えてくれるものでした。一方で、毎回の試合には「大きなミスをしてしまうのではないか」という恐怖も常にありました。だからこそ、試合前にはチームのスカウティングやルールの確認など、準備を怠ることは一度もありませんでした。そうして、私は常に全力でコートに立ち続けてきました。そのような中、2020 年には 2021-23 ピリオドの FIBA レフェリー審査を受ける機会をいただきました。FIBA レフェリーライセンス

を取得するには、日本のトップリーグで2シーズン以上の審判経験があり、初回認定時は35歳以下であることが条件とされています。当時33歳だった私はその条件を満たしており、審査への挑戦が叶いました。審査では、日々のBリーグでの活動実績に加え、日本在住のFIBAインストラクターとの面談、英語によるインタビューやルールテスト、フィットネステストなどが行われ、総合的に評価されます。残念ながら、このときの審査では不合格となりました。しかし幸いなことに、私は次の2023-25ピリオドの審査を受ける資格を得ることができました。そこからの2年間、これまでの審判活動に加え、英語力の向上やフィジカルトレーニングにも全力で取り組みました。そして2022年、再びFIBAレフェリー審査にノミネートされ、ついに2023-25ピリオドのFIBAレフェリーとして認定されました。FIBAレフェリーとなってからは、海外の大会に参加したり、日本代表の強化試合を担当したりと、これまで以上に高いレベルの現場を経験する機会が増えました。その中で、「さらに審判技術を磨きたい」「より多くの試合を任せられる存在になりたい」という思いが、より一層強くなっていきました。そして2025年から、私はプロフェッショナルレフェリーとしての活動を始めることになりました。

○感謝を胸に

私が中学校教員からプロフェッショナルレフェリーへと歩みを進める中で、さまざまなタイミングで成長のきっかけとなる出会いに恵まれました。その根底にあるのは、私の活動を支えてくださった広島県環境です。私は、広島県バスケットボール協会の一員として審判活動を続けてきました。幸いにも広島県では、2010年の全国中学校バスケットボール大会、2012年のウインターカップ、2016年のインターハイといった全国規模の大会が開催されました。さらに、U12からU18までの各カテゴリーで「全関西」という大規模な交歓大会も開かれ、全国の強豪チームが集い、著名な審判員が広島に来られる貴重な機会がありました。広島県のチームは、そうした環境の中で全国の強豪と切磋琢磨し、競技力を高めています。私自身もその環境に身を置くことで、レベルの高いバスケットボールに触れ、多くの学びと刺激を得ることができました。これらの経験は、私が各段階でより高い目標を掲げる原動力となりました。また、県外の大会に参加する際には、広島県バスケットボール協会やU15部会の皆様に遠征の支援をいただきました。そうしたサポートがあったからこそ、「応援に応えたい」「広島県のバスケットボールに貢献したい」という強い思いが生まれ、今日まで審判活動を続けることができました。私はこれからも、さらなる高みを目指して審判活動に取り組んでいきます。そして、その歩みを支えてくれているのが、広島県という恵まれた環境であり、それを築き上げてくださった広島県のバスケットボールに関わるすべての方々であることを決して忘れません。これからも広島県への感謝を胸に、日本のバスケットボールの発展に貢献してまいります。